

911.3  
7

Handwritten text on a vertical strip with a diagonal hatched pattern. The text is written in black ink and appears to be a title or identifier, possibly in a non-Latin script. The characters are somewhat stylized and difficult to decipher precisely, but they seem to be arranged vertically. There are some yellowish stains on the strip.

翁乃具の細道の記り且畫工  
七喜者南門とてそのの紺の深結初あ  
たな草鞋之妙をなれしに  
風流由まの結をたてしりそ其  
實はいつた所あ初結多之よ結  
たは草鞋の結を以て筆のふり子



丈之坊白居為雨卷乃心印を  
受て陸奥蕉門通中興とある  
り是正風乃衣鉢を傳燈とあり  
尾陽の多産城、松馮遊庵の時  
朱橋由乃句女とらけ之刀乃其  
吟の如月と花とらけ、梅樞の外  
の如く、松崎西よは乃花とあり

後中乃三月雪花とて其賦好と稱  
しる年乃の月乃とて其坊の  
幼少の記とあり其和と書録あり  
其を父の此聖通と美とて紙揚ひ子  
の此哲の麿洞の字とあり、  
心あり、  
瓢形庵と號し、  
雄淵を號と

嗣を二世に於て其の廣くわたりて去  
きし女はあはれなりてそのちた原  
とてつねにわたりてははるるをさう一葉  
よわがりの事だにさうしひ乃満  
形ん子に成難して母なる人こ一止に  
かやもあはれはひよこを意に主了  
のゆかしてあはれを授けしや六年

白石、士の五十遠馬了りりはあ  
雄河の追福字并にそと一葉冊を  
何と名はたをさきしひこを題たり  
今や此道が初くうへ更よ一止の  
油をさうしよこの燈のむる成り社  
乃緒のあ初ゆと斜のね西永ひ  
よしつては舞下子あいらの古

北をりーおのま松嶋よ弦奏ー  
やちをりん節をさふり打しるあまし  
この盆形菴にもゆひひ一ふん話と  
舞ねく甜の深臨結ひなまらむ  
まもしー以て是もあはくさるか以て清  
傳るま天保記集甲辰夏河や使  
るらま近きく海鬪典後



五十四回追善之俳諧

白居士

おくおのうけーあけりーあけり

振り香のりしー池の枯蓮 一止

さし啼りるのうけーあけり 夕風 大原

響の音る葉のゆ味きりする 秀花

笛ひりしー工夫しる極の板 瓢箪 線

扇浦ーて終るりめー 秀母

十六夜の園しるあまをらもあはく 休香

素人のあふひき——二葉菜

松眠のあふひき——松眠

総宣のあふひき——総宣

通山のあふひき——通山

苔山のあふひき——苔山

如水のあふひき——如水

知休のあふひき——知休

る菴のあふひき——る菴

斗周のあふひき——斗周

芳林のあふひき——芳林

其道のあふひき——其道

抱素のあふひき——抱素

菱儀のあふひき——菱儀

冨山のあふひき——冨山

淵成のあふひき——淵成

右一頌余略

其二

うきうきふたせの真実より秋の月

雄剛居士

岩船の薪の薪のうらな 函 南函

うらな 薪の薪のうらな 函 一止

薪のうらな 薪のうらな 函 函

薪のうらな 薪のうらな 函 止

薪のうらな 薪のうらな 函 函

薪のうらな 薪のうらな 函 止

薪のうらな 薪のうらな 函 函

薪のうらな 薪のうらな 函 止

薪のうらな 薪のうらな 函 函

薪のうらな 薪のうらな 函 止

薪のうらな 薪のうらな 函 函

薪のうらな 薪のうらな 函 止

薪のうらな 薪のうらな 函 函

薪のうらな 薪のうらな 函 止

薪のうらな 薪のうらな 函 函

薪のうらな 薪のうらな 函 止

薪のうらな 薪のうらな 函 函

余略

其三

之曲居士

糸の雪さひりしゆる風情の那

言きぬきよの 終る 集 糸月

温泉のあひ山の娘きしふおとまりて 一止

あり白はまきの可小ぬりせり月

月影もすし香ゆるは 蔭早し止

葉くらのあけそよりともなぬ月

はくしと 後をたふさすふ御園止

すぬ約逢の落しお 存 片手月

それ鞠をいぢつてきき返りし止

病をいぢつていぢもいぢ血のま月

おのゝとよきあつとあき南風止

春のあけつと 咄いねきえり月

智恵く高橋小窓のひやうき止

薫しとらふしひまふゆる月

旅あつと 言ふともしと 舞の市止

しとまをよる 糸の名をさる月

舞やうふまの通り 持ふ蝶止



ひねり細く年がらるるく 五月

余 略 夫芝門人之曲俗稱童子屋治毒一止  
ちよあはをりてとふ出てとふ思ふ

夫芝門故人の句一二を出入

灯を落せを枯木影を長隣子うね 萬寸  
后の月河をふ秋を庭一たり 投を  
燈火をかけけ何ら水は雲の青 斜に  
風や星吹きさく砂めく 曾外  
夢ぬ水を以晴 志了り 集の雪 白眉

風あくてもとまり火を相い合し 分字  
市人よりまありりり 浪ふ鳥 山来  
戸明ぬは詠連はをり 雲のそ 南平  
一切の葉もひくはの鳴 梨冠  
わらりし孫ちりゆく 海山の系 巾古  
清し而も新なる多治なき牡丹哉 故交  
山の松や新 秋の月 庭投  
梅もあをふははのそえあをの物 水嵩  
昔のわらもはのそえの梅り系 舟居

智舟の柳少なるを下、の邦、玉、旧  
 松風を余はり、吹き、山を焼、白、百  
 それを、し、し、あ、も、ん、れ、て、二、百、月、園、九  
 常、や、瑞、々、連、々、と、ま、り、の、風、小、鳳  
 松、原、や、お、の、ひ、ち、も、秋、の、元、巢、居

余暇

徳山、の、文、香、進、連、の、す、ま、り、を、  
 以、来、不、日

風の追ふる、と、流、水、を、秋、の、水、尾張、油、断  
 隙、細、る、雪、や、落、し、之、日、の、月、月、底  
 葉、初、や、蒼、ら、ら、を、を、を、ひ、し、ら、而、后  
 作、所、不、知、く、日、暮、の、ま、を、給、ふ、黃、山  
 羞、吾、美、の、来、あ、て、あ、る、あ、る、恒、松、か、排、名  
 名、り、や、所、を、あ、る、も、川、ひ、し、く、蓬、初  
 夜、を、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、麻、玄、那  
 あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、通、泰  
 雪、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、あ、る、思、文

夕やけを下う〜〜〜利歩子のむ 尾照 青白

燈籠のくもり掃ゆ月少ふ〜〜 呂川

ひらり糸を穿らぬそり 微塵ぬ

麻啼や葉山の先を照らす 金燃

必る流石糸を引きつゝ 不勝

ともの糸も皆をきく〜 多量の糸 言家

研牛そのの産を解〜 一尾

糸は〜〜〜むをぬを向か 島津

畑の角踏〜 出らや 意知

初とよふ〜〜 斗や赤は雪 宜夫

子たぬの梅子梅ぬ雪解か 旭暁

鶺鴒の糞火よりや果のる 楚江

津穴のもえ河〜 子き海を分 仙陵

戸は馬あり〜〜 唐庭の月を分 笠石

掃あ〜〜 新の志を分 月夜分 我亮

門入〜〜 中を二軒や菊のむ 鵬居

種あ〜〜 糸は糸を分 糸を分 李曠

夕鳥や川風を分 柳の下 平泉

二儀とらわしむるや鹿の炭 尾津 風也

折ちて不余もよめるぬ山の梅 三つ 卓池

為し時様のおちや横より 波又

名りやいさよふれもなふらう 塞了

ひびくははをまうや三重けし 水井

虹らしてまふ日おや 后の月 遠宇

けしおややがしぬきをねすま 三つ 且松

命をまきしよやや池の鴨 真山

二重のうらまははなうけしを 清鼻

乃こそ折らぬいあもあしはも 其葉

之月やほえくをひきけし 年々

満りや蹄を冷をひきけし 兎牛

求食鶴のぬねゆりぬやまな 杜水

枯ちて月もさしぬ尾をさ スレカ 碧山

舟りけし砂粒をぬやまの秋 高岸

方こそ枯てまけしをる給ふね 桑且

枝のま 早瀬く満す様式 連山

折るや木のらの麻丸たきより 又翁

旅ありて忘る一年もたつたなり 相一

ありて 別々 道は 友梅、石鼎

ひきつり 龍の 尾を 冬の小 アツマ 里 垣

聖の 馬あり 道あり 白く 子 危 礪山

子 佐ふ 小 但 せ 痛 多 や 是 道 夜 虚 白

凍 乃 七 路 ち ち 某 一 ち ち ち ち ち 蕙 逸

た 子 子 あり け 美 小 寐 ち ち ち ち ち 九 夜

明 妙 ち ち ち ち ち ち 梅 の 月 月 坡

扉 や 亦 ち ち ち ち ち ち 浦 傳 心 玉 屑

小凡のひら先風く梅の花 イセ 松波雄

枯果一書の流れわら 鷹うね 崔叟

葉のむや詠くもあくえて通る 梅麻

門遠い一さうふとのよ松のこち いと不

やこ一物此焚火ふちもあそふ系 深芳

大河くさあけあやと船の秋 夜白

時鳥 夜涼子 樹この上とよき 淇石

しるるしる船系 咽の 靴や柳のむ 省吾

隣子 歌一 消さく音やと船秋 東宇

旅あつと 意う一 年もわらうやう 相一

あきより 列をいそぐ良女梅、石鼎

ひらりし 龍のうはうて冬の川 アラマ 里埜

聖の鳥あり 遠より白くきりる危 砺山

子休ふも伊せそ 瘴やそ遠夜、虚白

凍りも路をうまうらゆるとこ系 蕙逸

たよりよりし 美ふ寐うら お撲 九衣

明あらし せけいひを 梅の月、月波

岸や 舟しるら 舟ら 浦傳ひ、玉屑

燧より下りてきたりける爆弁式 下三 札下

隈ありてそまふところ別月の舟 系物 梅室

群さや玉の夢より下りて鳥一つ 梅通

時ふもや地振りと心入るあすき 九起

日よさゆらぐ中庭にむや秋の月 月節

人よえそねて流るる新橋式 風光

鶏もろもあそくく 雲ふあそ 犬翠

雲のけそ人夢言し 萩の中 枝月凡

川より下りてありや雲の中 浪節

わらわしや花らや中世赤坊僧 佛火

舟のともゆり入ふ来り月夜式 杜鵑

姉やそねふ時ふり 鶏や首さの家 芳英

いそりしや花を物系小柳ひたり 卓丈

ちりりし 雁をそと月と梅 一

おかけて係とら月やをら花梅 鳥谷

朝風もゆりし 水もあそび 益寺

風いおこの名月い流るる 浪 伊波

よく帰る事ありし秋の鳥 興左

伐了るこま葉あけしよ 十一 其山

石啼々月見の三層さあらしり 埃見

名りや又るあはれを海をく、白鷗

漸苔の香や葉のりたる響の中、林曹

ともけりしきやあ葉の川やい、白花あ

日のりる雪少眠く、了の上、素屋

初りのこいふき、りる給ふ イタミ 太乙

本末く、いさぬぬ葉の砂あられ、曲阜

押合さ、あきり、入ぬ月と梅 フシ 岳風

ひらり、おえてはまらあ葉 ヨト 吟風

ちさねいぬるも タビ 九葉

海苔葉の白いや風の吹あらし、月想

朝のや中りく、い海あ タビ 雨新

あやゆるむもひくふ吹雪式、夷白

あつて、アも タビ 抄る、た和葉

戦くあいの月少幹、赤柳式、其類

葉の雪、紅葉の色あらし イナハ 南炭

あし梅、斗あらし イナハ 野屋



石のりや月の心よよ 草の上 ハルキ 鳥 隣  
 万々やりのろろ 戸口をさし 向ひ 乙亥女  
 雪降てりりて 林蔭のりし 水くさ イッモ 亮 曠  
 世捨て道く 来るや 子会り 九江  
 積ましく 東待門の 廿新のね イハミ 竹 庵  
 世に水く人さ 足く物さ 捨の系 志 玉  
 山 葉 世 や 二 市 へ 来 たり 交 へ 喜 地  
 阿の戸 せり きてり 阿の戸 へ 霧 村 ハルキ  
 本下 寄 ぬ くる ぬ ぬ も 阿の戸 へ 南 坊

捨て来る世のり さい せ せ せ せ 伯 也 ハルキ  
 朽く 家 せ 丈 夫 へ 樞 の 葉 細 の 系 牙 腦  
 松 風 の 音 せ 山 阿 手 へ 念 衣 加 茶 夷 珍  
 柳 少 ね 目 せ 大 葉 も あり 始 修 あり 孤 山  
 眼 の しく きて け や 枯 神 へ 夕 作 ぎ 莊 蝶  
 新 島 や 半 へ の ぬ せ せ 大 敷 の け 布 圍  
 鷺 の 来 へ 何 物 とも せ 大 河 の 池 修 中 史 也  
 雪 や ぶ しく 鴻 山 へ 来 たり 喜 素 外  
 風 の お せ せ せ せ せ 本 の 系 白 珠

ま〜れふむささ〜ん〜んあ〜んを 備中 松年

ゆるゆるや何をか〜る〜るあ〜の中 ヒコ 夢萩

折〜て〜を〜を〜く〜つ〜 アキ 杖栗

山吹や〜あ〜り〜り〜の〜山吹 アキ 風外

卯〜り〜り〜知〜あ〜い〜い〜 アキ 智頌

風〜る〜あ〜の〜水〜り〜 アキ 礼二

夜〜風吹〜ら〜と〜あ〜ら〜り〜 アキ 老圃

編〜束〜あ〜 アキ 素兄

畫〜了〜る〜ら〜ら〜ふ〜あ〜 アキ 芳水

折〜い〜は〜り〜と〜と〜 七門 岑誓

涼〜さ〜や〜人〜ひ〜り〜 アキ 田二

下〜尔〜折〜く〜 アキ 新甫

さ〜る〜葉〜や〜葉〜の〜色〜 アキ 菴月

暮〜の〜初〜や〜 アキ 宗形

あ〜ら〜ら〜を〜 アキ 真乐

あ〜る〜る〜 アキ 梅亭

芦〜の〜 アキ 涼外

ま〜 アキ 松海

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

蘇州府志卷之四

ふあしーのまはりのたを杯やむの門 千七 宇逸  
人白のふくくまらるや岸の英、斗丈  
夜ハ町のま中ふれる柳成、瓦木  
名月ふぬれをもちもや畦つらひ、泉砂  
山の井のま汲上る日初つ那、紫雀  
おろりふれをへる人河の月 千七 山公  
おろりふれをへる人河の月、度五  
はめをまらへ白ふくく雪の店成、葉を  
地ふあしーのまはりのたを杯やむの門、赤鏡

ひくおさふりまのこのまふりま、抱松  
ふりやふれ旭や後のま、木 千七 木又  
抱もあしーのまはりのたを杯やむの門、可推  
持てあしーのまはりのたを杯やむの門、招堂  
深く出る夕山陰や、美り水、芳村  
昔通くも雪の掛小田桂系、紫鏡  
まはりのたを杯やむの門、秋 千七 芳  
あしーのまはりのたを杯やむの門、三岳  
小庭も、焚てをまらへ小あしー、む村

何れもけの星何れもねそ 別業 一葉  
 川ももぬらむおぼし 池のあり 五柳  
 多産不湖まててけう 春の月 <sup>ヒツ</sup> 悠こ  
 卯のむを厚たてし 釣の刺くる 眉山  
 日さうけてふあたるやうや露のむ 寸長  
 人さふちうけりし 世のやう 之 同  
 ねもさふを折くし 糸さめり 麦稜  
 糸のむも折りし 糸の糸 礫山  
 海ねそもあふもさうり 性糸 <sup>性糸</sup> 岱雲

あり水あり 鳩水が葉や市下宮 市田  
 来る花の用りりあり 水の陰 二石  
 飛くやあはり 柳をそと中 不業  
 平らめてもふい日やむの巻 式 <sup>紀後</sup> 謹 跋  
 吹りつねしそむあふ 芒うね 舟月  
 月さうりしふ航をあふ海ねりり 東を  
 ねて海ちやうていくはむをさう 鬼白  
 起くや市の葉あふりて 床の糸 <sup>日向</sup> 双鳥  
 之は月やめてさうさう 花の月 蛇岳

草のむねついで何ありその皇 月雄  
 るり麻わり葉かそれとあり小亀 其石  
 一日とまきくぬやうふるはテうふ 巴石  
 風かぬぬもあつりり拈尾を 茶束  
 海山やとらう向て七秋の立 大偶 松夏  
 即く能ふうつやまのふ水洞 知 二外  
 ちこころのまらふと風北あふは 阜寧  
 云々はせしちぬ水神のそそ多くと 虫二  
 いと揃りほりし暖たり歌連存 廿二 波文

葉凡の吹きぬぬや 宿 のえ 得音  
 下葉い小萩あつりり 正 葵 山骨  
 黄よりり後しを移る少そふふ 寺後 揃例  
 ちりくくとむり隣ぬまううね 淇水  
 産ゆぬぬりしたうや亭を振 大和 繁雄  
 晴のハ精、悦ひり玉りり 苗海  
 刈細む襟小柳何り 至合のむ 墨居  
 ううさぬそ米の而ふそ新葉式 金葩  
 あり継を細しそ後ら小葉式 何門 古境

華凡の吹きまめや、夜のはる、得音

下草い小萩あうり、正茶、山骨

貴きより後、しを移る少きうふ、手紙、掃例

あつくと、毛、降ぬき、うら、淇水

産好紙ぬり、たうや亭を振、大和、繁雄

晴のハ精、悦ひり、毛、苗海

刈細瓦、襟小柳、何、至合の毛、墨居

うりまめを、取の、面、子、新、茶、式、金、龍

あり、継を、紙、し、う、産、ら、小、薬、式、河内、古、院

御堂のつや千川の松のうゝ、福海  
霧よ水を伴もむさるる女、鶴が、自來  
名月や眼を飾るるやうのら、不二門  
常や啼よ手扱もあやうは、梨 松石  
雛子啼や山うはく少松原、若十 鬼月  
常のかくくやあう令と、端、菘園  
あうくやその地をなれく、山 岩  
あうくやあうあうあう、山 岩  
河の先やあめきんかて扱も、山 岩

お堂の松をえとくまらわるあうは、山 岩 車林  
其の白山の松をく、山 岩 素波  
立まてくあうくあう、山 岩 英峨  
砂川や海邊か、山 岩 丹嶺 加賀  
あうくやあうあう、山 岩 大夢  
あうくやあうあう、山 岩 悠平  
あうくやあうあう、山 岩 石梯  
あうくやあうあう、山 岩 左白  
あうくやあうあう、山 岩 鳳兮 能登



生花

花の生るる所

稻皮

稲皮の生るる所

花雪

花雪の生るる所

鱗化

鱗化の生るる所

無外

無外の生るる所

布山

布山の生るる所

里凡

里凡の生るる所

志雄

志雄の生るる所

如翁

如翁の生るる所

尾

尾の生るる所

夾室

夾室の生るる所

西夢

西夢の生るる所

花帆

花帆の生るる所

光素

光素の生るる所

茶山

茶山の生るる所

周高

周高の生るる所

真哉

真哉の生るる所

百花

百花の生るる所

亦種々松も種々葉も種々 百 富

一葉入しそものうきそ 一 年

約進の外も折る種々 一 年

旅入り名をぬき 一 年

咲きし 一 年 信 布

魂極り 一 年 信 人

志 一 年 信 九

石 一 年 信 南

江 一 年 信 葉

細 一 年 信 外

子 一 年 信 我

朴 一 年 信 也

能 一 年 信 命

多 一 年 信 原

近 一 年 信 年

あ 一 年 信 匠

く 一 年 信 花

敷 一 年 信 士

あつらひし花の色やかりし情 廿七 立字

雪晴やきやうあつらふさく雪晴 如く

舟小らに抱くねて明ぬる船 はつ 風朗

所喜の李存りし種にけりし 一具

雪の夜の隣へともる抱ひうね 旭海

河帯のありをちりりり 村妻

あまや一足引てひとあつた 逸園

阿のむね集てさぶかや田の原 竹山

初年やんはけて抱く柳の葉 芝耕

あのかく抱く雪もく 小柯

そらや 有仙

後のふきをふきの柳 大之

健 節之

は 柳令

遊 美古

ち 惟竹

拾 北賀

ら 松秀

山ゆや梅のさきゆく春らしき  
山外

老を知らずのふしきよ月一夜  
金令

あをさしふるあくす唐の一ね  
深く

きぬくし原のまの 覚えぬ  
巴山

炭竈の煙しとまねてその  
秋香

栴ゆや一本をまねて降り  
為山

冬にゆくも知くそ芦葉 磯あか  
遅流

石をさしらすまをり 鶴の 鈴雀  
音何

さらそやとくさく立く 秋の風  
風外

夢よりをりし 降りゆくも夢の  
抱儀

をく鳥の二つふゆる 風信ふ  
魯心

雲の初もまきくは 氷くも  
氷谷

立ちゆくは 鳴れり 堰の鴨  
茶臼

時鳥啼や 町あのを 入る  
大沢

松を折て 一も 西に 燈籠  
粗文

人の海をて 遠くは ぬれ  
丁知

午時ゆきし くらふ あり  
松竹

初あや するま ありあけ  
竹茶

以の形もや秋立水の菰 見外  
 菰印やさきりあき 橋のあ 更外  
 免んふ不極く韓ふ山四の形 呂叟  
 蓋をくてもとをの白いふ形 弄化  
 湯水洞のわたりてまむお葉 梅笠  
 ところろくお葉してころや初月夜 卍息  
 まろ柳や吹雪かたて 一つり池 後物  
 雲母やふらふらり余らしりの市 東原  
 峰さくぬ山のとをいりる雪解うね 碓氷

河一けりし道水もさうり 時鳥うね 卓郎  
 高垂りし神は枯れりうあのを布 味舎  
 かけたころ 穢雑白子布圍うね 尾山  
 山の尾入吹雪かりしをいりけりる 米山  
 まりのたけぬ人のあかたしその梅 ちの尻ぬ  
 楯よりしころろく筆をさうすこ 百尺  
 青もろや根の形も山さくろ 溪高  
 秀道もあやねりし山の形 石居  
 除く後もあぬ日やまの入 流笠

あつと	や	舟のら	さる	通る	音	未	菜	
梅	香	や	り	合	子	川の	あ	水
芦	千	房	能	う	る	雪の	よ	る
さ	し	こ	や	後	ふ	き	う	し
梅	の	あ	ま	を	ち	を	免	て
雪	の	ち	ち	と	と	り	り	り
菅	の	ち	ち	と	と	り	り	り
さ	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら
お	月	や	直	さ	も	を	ふ	は
物	言	り	ま	の	お	と	れ	り
米	や	推	伝	月	継	月	米	や

う	ち	と	け	こ	と	や	五	合	の	あ	と	忌	已	十
船	う	ち	や	夜	の	ほ	ら	ら	ら	ら	ら	ら	清	く
う	舟	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	祖	り
櫛	の	う	け	り	の	あ	も	つ	ら	ら	ら	ら	五	爾
樹	の	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	後	吾
尾	急	の	と	吹	風	あ	さ	ら	ら	ら	ら	ら	南	枝
り	ま	ち	や	日	一	雪	ふ	山	の	て	て	美	塚	
雪	や	柳	の	中	お	し	ら	ら	ら	ら	ら	杜	乃	
解	て	行	る	雪	の	さ	れ	ら	ら	ら	ら	頰	乃	

高野の山 不知

高野の山 東升

高野の山 素撲

高野の山 由誓

高野の山 湖山

高野の山 碩布

高野の山 正女

高野の山 是珍

高野の山 五後

高野の山 南く

高野の山 佳年

高野の山 雞年

高野の山 左師

高野の山 月貸

高野の山 邦真

高野の山 荑莪

高野の山 呼牛

高野の山 裳江

彦彦

上徳

そゆのひまもつても 流るーく水が 洋舟 カウヤ

さくさくや 秋ふせりし 虫の夏 攻二

弓陀の人 正名 トナ 人 叶るの日 文鳥

てしとー や苗を種出さぬぬ トナ 鳥 筑

岳奥や ちり 細るき 汝かきり 山雪

務のさく袖を ひらけて 雲ー 岩の上 幻芝

撮先の ちぢいせて 月 又う那 京曉

起されて ねずて 出さぬ 叶る鳥 知風

ふささーいひーきささーく 杜あ 喜坡

初蝶や 起さす ちる鳥 安り 士明

宗合の 舟舞 ありし 秋の秋 李堂

動おしめりし けさ 田ふー 上毛 西了

まろ天や ちるを ちりて 宗子も 舟烟

急ーの けのら ちるり 水ふ 松蔭

海面く ちるり ちりし 葉の月 木公

ちりし ちるを ちるき 叶る 乙人

ひと 隅ハ 葉中 隈けり 庭の地 下 楓葉

ちるちりし ちるを ちるき ちるき ちる館



花もをて料理の橋よき草の如  
その後の庭も是より山さくら  
初秋乃かけうさぐと縄とこれ  
乃、半ぬ風平、や、ま苗うね、未  
それ支子踊てりや、橋、心、庭、如、聖  
空、了、了、か、ふ、足、を、る、後、あ、が、大、儀  
あ、新、く、庭、庭、り、ら、や、な、の、月、**●**、亂、山  
鶴、乃、浦、を、あ、り、て、お、う、や、な、方、の、中、**白**、橋、葉  
橋、芦、の、と、う、り、引、や、船、乃、汝、**白**、清、景

掃除、了、秋、と、志、く、く、庭、乃、邪、**射**、月  
船、影、や、き、又、お、日、陰、も、恒、ひ、と、**一**、**仙**、孫  
川、節、い、そ、終、も、え、う、け、り、終、乃、梅、**風**、毛  
あ、は、は、<sup>は</sup>、し、く、<sup>は</sup>、庭、乃、さ、り、<sup>は</sup>、其、の、月、**ス**、代、女  
捨、も、の、あ、り、て、あ、ら、う、ら、橋、本、系、**清**、氏  
掃、う、け、く、庭、乃、さ、り、<sup>は</sup>、其、の、月、**英**、乃  
カ、ヤ、く、く、と、梅、の、庭、乃、や、舟、揚、り、**舞**、夫、**サ**、川  
相、一、系、ち、ね、は、日、の、さ、長、庭、し、<sup>は</sup>、可、申  
足、を、あ、て、の、<sup>は</sup>、<sup>は</sup>、橋、乃、山、乃、**一**、**仙**

をのり、目名り、ありぬ、抑ひ、  
英泉 至

一、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
東里 至

暑、少、も、限、り、の、何、も、や、言、ら、ず、  
丁酉

高、の、み、み、み、み、み、み、み、み、み、み、  
西員

之、日、月、や、も、あ、ら、ま、あ、ら、ま、あ、ら、ま、  
草之

春、の、あ、り、買、り、り、え、や、ら、流、う、な、  
士由

村、中、に、は、あ、ら、ま、あ、ら、ま、あ、ら、ま、  
守之 至

川、に、免、て、川、小、な、ら、ま、あ、ら、ま、あ、ら、ま、  
大費

廣、さ、ら、ま、あ、ら、ま、あ、ら、ま、あ、ら、ま、  
かつ之

何、骨、や、松、の、常、り、と、と、と、と、と、  
乙文

ひ、は、ま、り、と、あ、ら、ま、あ、ら、ま、あ、ら、ま、  
鎌新

あ、ら、ま、や、る、程、ひ、と、あ、ら、ま、あ、ら、ま、  
栗吉

一、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
之、平

形、星、乃、畫、く、入、り、り、あ、ら、ま、  
六明 至

く、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
柳志 至

文、月、や、あ、ら、ま、あ、ら、ま、あ、ら、ま、  
其柳

風、や、あ、ら、ま、あ、ら、ま、あ、ら、ま、  
榮雄

頼、帝、て、先、小、め、け、き、き、き、き、  
松園

舟のゆれは岸を流るるや葦の中 白鳥 加景  
 送帆ふ動きのまらき、月夜ふき 耶如  
 日乃中やちのりさきふ啼一哇 北く  
 酒一仰やそえ侍舟の一掃除 父梨  
 方角のうまねぬ風吹くは後が 澄月  
 吹通直風のりぬらき、おきふが 文理  
 よりのあそむ物と清や新阿やめ 桂二  
 何れ名をなすこあらぬ夷海、秋藤  
 道中とふ日乃暮るる秋の山、葛人

舟のゆれは岸を流るるや葦の中 双魚

松林の中おのろきあひのひりのふ カカセ 巻二

白居易：士像賛

暮雨門生弟一賢高陸妙句

満山川人稱東真正風祖名

饗 顯然五十年

映

大原景

満月入新阿そらうもまのれり 以之

そいかに口切花のうすきなり 三郎

刈そこの新阿もさき長 四のり 珍和

暮る合はるる小宮や 月の麻 南柳

此直中 燭のぬる 枯燈 慈女

川をささくして 詠 千鳥が ウキキ 詠 柳 マシダ

東風の中を 松 マシダ 松 マシダ 松 マシダ

七月や 龜 マシダ 龜 マシダ 龜 マシダ

管やちの 乙 マシダ 乙 マシダ 乙 マシダ

花らの 松 マシダ 松 マシダ 松 マシダ

啼きひり 可 マシダ 可 マシダ 可 マシダ

月代を 粟 マシダ 粟 マシダ 粟 マシダ

涼とあつ 和 マシダ 和 マシダ 和 マシダ

道より 若 マシダ 若 マシダ 若 マシダ

詩人 芦 マシダ 芦 マシダ 芦 マシダ

明り 岩 マシダ 岩 マシダ 岩 マシダ

はらりと 如 マシダ 如 マシダ 如 マシダ

あつと 壺 マシダ 壺 マシダ 壺 マシダ

春と 美 マシダ 美 マシダ 美 マシダ

山吹や 月 マシダ 月 マシダ 月 マシダ

かきと 女 マシダ 女 マシダ 女 マシダ

火と 東 マシダ 東 マシダ 東 マシダ

下りて 美 マシダ 美 マシダ 美 マシダ

此ふ人乃 後く出る 雲之邪 福事  
控りし事々 涼むし くらね 控りし事  
ぬる 此も ころぬ ぬる ぬる 福事  
ぬる 飯や 出て たりし こと 一 歌 福朗  
有明り さま ぬる ぬる ぬる 大 歌  
と ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる 放言  
吹たぬり 中ふ ぬる ぬる ぬる 萱堂  
舟 ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる 梅幹  
控りし事 ぬる ぬる ぬる ぬる 舟葉

梅り ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる 呆林  
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる 松奎  
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる 松亭  
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる 井人  
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる 万船  
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる 万舟  
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる 射洋  
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる 札山

云ひ立子也 市や 雪の朝 魯川  
 旅人のよき 挨拶や 暮乃秋 摸城  
 親舟の帆 不た水 米池 岩谷半  
 起す水く 又如歩り 也益の月 升半  
 おしきも 是は ぬやうまや 荊棘 山来  
 朝の朝の 吹込 舟や 時々 菱々  
 蒲公英 やら 糸ぬく 朝歩り 了玉  
 風ふゆや 一夢七事 ありきた 桐高  
 枯るや 少ね 不細 古の月 和半

万葉の土産 羊々 福子代 一平  
 いまの白の 入さし 中々 時々 係風 三ツキ  
 晴るや 落らく 撫の 白ひの 系 荻山 乙巻  
 雲靴く ちを けーの 白ひの 系 七有 南古  
 あふ 吹風 しく ちあ 系本馬 台之  
 電とん やさき 月 の 白ひの 任何 梅合  
 刈秋や 若の 舟 橋 不啼 鵲 貝鹿  
 挨拶や ちの ぬの ぬ 様本が 井園  
 初草や ちの ぬの ぬ 大何 リフ

激るのふけりいさめて鹿の電分 松六 梅浦

こころ夜や月の影を門の子 壺浦

ねたうり男ありりりりあのみ 麦安

弘治五年八月御幸七ありありあり  
とこころ地味ありてを欲手  
侍りーにこころ一止老人曰  
唐を侍りあり士の道徳をい  
あここのあここの 石巻

やりの山と大とくちの音は是が 二品

卯のまやあもあをあり嘆く 曙寺

狗のあさありああり時をいり 六甲

維のあさや甲のあささる藤布 洞む

あふりりりりりりりりりりり 浦人

も同じやきあふりりりりりりり 二就

夏あさやあさささささささささ 丁二

しんりりりりりりりりりりりりり 竹求

りあふりり静かきやあさささささ 花縣

あふりりあふりりあふりりあふりり 意花

あふりりあふりりあふりりあふりり 糸系

あふりりあふりりあふりりあふりり 後段 素明

あふりりあふりりあふりりあふりり 一布

月さう猿に儼おとす和る秋月

佐理門

望里

更るちと東ハ静ふ里却り亭

米菜

蝶のちとけしの一まにさりりり

白之

清しそとつゆりし終筆共

錦山

抄決ありに暮るは露ひらう夕納涼

素仙

高折れ舟抄の候のわうあ礼

丈紫

カセカイ

多折れ紫にそとつゆりし終筆共

松里

徐若

春記そまき田を新のけしそ哉

柗仙

町中やゆ屋の桐りも梅る景

梅林



ろきものりやうき波のしほり哉 梅笠  
 まうつげん小巻のわきしほり哉 梅央  
 梅笠—菊搦のしほり哉 万巻  
 何巻とんやあふう梅のしほり哉 完身  
 志々女形やゆれくるまゝうくれ表 松生  
 漸凡侍くあうりりくれし事 三川 米夫  
 ちのちきるあゝもあひまのあ 曲川  
 川梅敷くまゝんのあしとあき巻 木從  
 色々のりしんしん飛まゝ先哉 南南

けさう終に侍おしとあなる月 飯野門 宿里  
 更るあゝあハ静ふ里むのあ 米茶  
 蝶のまゝけしの一まにさうりり 白之  
 滑してあしつゆり—終篇哉 錦岱  
 折れあうにあゝはあひらう々納涼 素仙  
 ちあれあ井あゝのほのわゝあれ カセカイ 丈紫  
 ちあれあにまゝつゝまゝあをあ 深若 松里  
 若紀をまゝ田をねのけしとあ 柗仙  
 町中や梅屋の桐も梅屋 梅林

新しに人のえたるもさき意の如く 玉宙

阿や免落をえよるまのほそく哉 新眉

ふさく免、博つくやるの能くけ ニヤ 廿二

出るまいにあそろく カ又 卯啼

伸るまゝとぬき 枯屋 在月

常や終るまゝ 何 天姥

まにさける初とた定る秋の水 葛岐

治のおと初め 少 三且

随きつゝ ま 阿夫

左のゆるりぬらふらや 稗解 鳥毛  
くすの一枚細やけのむ 一丸  
白布とくしやうぢの陰に入り哉 古孫  
まきしとくぬるま山やうきさの秋 魯周  
屋系ふもとくかていぬのかくうり 市隆  
まきしとくぬるま山やうきさの秋 林魯  
さやうぢのぬらふらやうらりの出 友水  
ふゆの地のぬらふらぬらうら 市魯  
淵のおとりのうらきくやうぢのぬら 長あめ

新しにくのえたはゆるききぬら 玉宙  
阿やぬらぬらぬらぬらぬらぬら 新眉  
ふるりぬらぬらぬらぬらぬら 甘二  
出るまじにぬらぬらぬらぬら 卯啼  
伸るまじにぬらぬらぬらぬら 花屋也  
夢やぬらぬらぬらぬらぬら 天姥  
まにぬらぬらぬらぬらぬら 葛岐  
治のおとりのうらぬらぬらぬら 三且  
ぬらぬらぬらぬらぬらぬら 阿美

子傳にまをハスそかる橋本哉 柳子

くの秋てハ巢に高りり花の子 明々

灰土の何したにぬる火新のぬ 昌々

持留るまひたまきまや華のを 後伝系 之梳

笑和りりた集の行んゆりも 东山 南居

角のうし一旅をししうら喧初ぬ 秋富

思ひる由きし事うしうよきく解れ 五岳

棹として保る候や月の舟 互理 左舟

そとくまそ一瞬のけそけしのも むら紫

おに涌りおて居るやあらりり 右松

田のまいるあのもうや晴る新 左海

情陸や控を于たる羊の麻 角田 武川

網りきぬさあふるさささ少事る新 大和

まきまのそまの秋さつさる柳る 梅叟

おどろくまそりのきりにりり秋の襟 文好

塙幅や糸の入りのかきぬり 大右

まきまを渡る火の海しきおのぬ 宝三

まきまのや換子のりに晴る 三内

夏の地にささみのつゝや秋の白 枕仙

きのつらりふ雲のかりや交衣 南桂

さうなをむけに接するさあむ哉 平安

川舟をゆてゑるささむ哉 豊水

出雲したさの切智や夏の月 山居

酒に心をけしむるゆふの如 秋暮

梅咲くや清きにうらる 物お秋 佳年

人の田へ梅はさけりさうさ 東河

柳吹く喜所うちにあつたあ 栗泉

あつたあやあつたあ人の心 斗山

あつたあははにあらさ月の方 有佛

吹く風も月のあつたあ 文理

ささむに茎のあつたあ 夕佛

あつたあのははつたあ 水取 新常子

あつたあははつたあ 鬼風

あつたあははつたあ 采江

あつたあははつたあ 和久

あつたあははつたあ 鬼子

あゝあやあゆぬあめくさ 斗山

はらうさハ海にあらさハ月の窟 有佛

吹く風も月のあつさき ねたあぢ 文理

そよ風に墓のあし けさける 夕佛

あゝあゝのささねるとさる 水取 糸常子

あゝあゝとあゝあゝのあぢやあぢをさけ 鬼風

あゝあゝやとと植ゑるさけのあぢ 糸江

あゝあゝあぢやあぢけさるもあぢをさけ 糸江

あゝあゝあぢやあぢけさるもあぢをさけ 鬼子

名のきねぬまのきり口なる法也  
 推  
 信一坊やりと思ひ、ある堂  
 鬼山  
 掃の穂の並能掛ふおぬの取  
 鬼堂  
 観成るるさくの後のまゝに取  
 鬼尾  
 出代のなれおむや小茶をけ  
 鬼柳  
 行秋のらとまよふやあの高  
 風草  
 雪にとまかゞさるる宿や法をけ  
 葦母  
 義むくくわきくゆる夕平の取  
 勿来  
 枝ねの白いもきく一隊むら  
 危橋

葉のむとぬけをむらき世はは  
 翠葉  
 山崎まを碓のさきりりおまのせ  
 森鳥  
 人々の座を法一細のき方  
 一北  
 ともおく種をりりわむりまを捨は  
 野菓  
 あり向かい今来一まを初所  
 啄秋  
 あり例に存てせり掃の掃原は  
 友甫  
 ままやわたりし高き樹の空  
 宗二  
 海士らるや用らけるのも舟の中  
 斗南





何事や素染のありや何れ 風兮

永きりや尾おき人のあは 貝所

きぬ指何しきみのきむら 左梨

時々の川流しにまきつて 和柔

新々や埃もろくぬる地 洗之

島のきつるのほろり 落の羞

味のあはれを馳そやと 文哉

なつ流もあはれとさう 可有

おのりてりとのまらと 素風

口所いひくひのさき 田原の 星橋

田一 ねおしきさるや 燕つよも 故丘

裾をふくう 雲をまき 田のゆき 玉泉

雲をやり のりおりに 霧うらま 重高

霧のむしうく 来るや あり月 雨 一浩

江の虫 ねぬる 涼きうら 紫井 双井

何しと 夢をたぬるや むしお 紫 二丘

掃き 舟にのり くらうき 羽人

ありきの 夢に よむや 雲の 久吉

日をもつけ 夢の 梅の 燈月

えひうら 子を 侍無や 七曲 吟霞

からし 今も 昔も ねの 水牛

ゆきの ね 果あき 早お 豊丘

花をの 新お くりり ね 月 士由

晴か ね ね ねりや ね 二飛

ねうら ね ね ねの ね 一 歩廣

えら ね や ねの ねの ね 田の 面 牛来

小お うき たる 雲 山 支山

まの矢やうた 知のき 信を 秋の鳥 致物

啄木鳥の 影や 木の 冴の 涼 清産

鳴るゝゝ ありお ありりゝ 山田 緑峰

秋のきつ 影や 川筋 鶺鴒の 姿 船外

草鞋や するに あり 阿ふ ありき 枳田

草鞋や ありき 結し せしき 双浦

虫代の 歳な りきき びる 鶺鴒 川丈

ね ね 橋の 影ふ せしき 鶺鴒 斗玉

鳴るゝの ありき せしき 鶺鴒 金山

あのかき へん 透す せむの 花言 芦鱒

七夕や 紫の けしき ありき 鶺鴒 南唯

おぬふ ありき のかき ありき ありき 左十

りゝゝ ありき ありき ありき 鶺鴒 和生

鳴る 戸に 袖ぬり せしき 鶺鴒 拵花

秋の ありき ありき ありき ありき 依柳

窓の ありき ありき ありき ありき 和扇

鶺鴒の ありき ありき ありき ありき 亀法

牛も ありき ありき ありき ありき 和柳

子婦の香や白のさくらかへ花を 起延

おちふくさ葉の香や初雪し 起笑

笑播ふおとらハちぬきも 素志

おららーのいと息ふー新雪也 文志

極込に人ぬきまぬやおのまも 楚月

こーしーのりふ表さや 又まつり 起石

ま極やしらにがふ子供袂 菊意

侍やや極先におく現翁 如光

蜻蛉やわつらの宙にふかちし 月賀

又区統ハ又嘆にうり燕子も 匡芝

紫さくらにんきひりもむら 万古

くらまおやまかきあうに界壘 月友

さー夕の泡のおさやまの月 自来

おとまきん一夢也ーまをほし 秋田 津風

あーしーとんそある山の海もは 梅之

るおとら毎にまきりし口形は 唇口

柳のくま雪のまうにかへ新雪り 月々

らーしーふんはーまをいふる魚を 柳詠

えりによし一歩沙汰をふりし 月湖

さぢい人のまきしけりやぢの忠 良如

さしたのもあはれ社伸くちる柳 由秋 由峰

新さしそむに宮とるや后の月 銚若

さうきや清くさか里りの阿はら 如丸

終はまはれ子のけいさくし終ふ 一平

柳しそ降るるもらうん草物 白旭

さやつきもきぬ梢より一葉の如 卓寺

おしるもや海を望むた暮るやうき 忌谷

此後いづれおしし晴るる天は川 箕年

春も暮るも日の入る山は秋の暮 八戸 子彦子

さきりた帯をさし物さし 野原 子孝

けいさくはひくまはるや秋の澄 小傳

漏まに考へつらぬ阿きはる 文河

さよしあはれ阿はぬ春の山 文喬

さうけはれよぬ人暮るる春の山 寛北

さうりも低くわきるや秋の暮 嵐芝

交りの律義もいづし 津松 如菜

葉吹や霧の中にあるおとろけ 玲也

月鏡にちと常もさる水魚 水魚

霞りそ 残雪の松に月も形 鬼雲

仙城

梅うきもや 明く 倭子の一定より 景子

空を雲や 花は けさを けさ 香静

浪係のうらうらきうや 華の鳥 枕鳩

口切や 古きくちの 鏡の鳥 梅門

何ぞも 水も 涙も けさ 香静

相いりしとんえくきまはれまゝの  
ま

なつとく日の静さるるまゝの  
一 時

二三枚まゝの静さるるまゝの  
見立

うらひまゝや笑しつゝまゝの  
以中

おとんとまゝしつゝ秋の静さるる  
一 甫 松本

おとんとくにつるまゝの  
字 据

ゆつとまゝの静さるるまゝの  
格 炉

と申おける静さるるまゝの  
而 先

とんまの静にぬるけしき  
耕 山

まゝまゝや静の中あつるまゝの  
玲 七

れ終にむと静まゝの  
水 魚

静りまゝの静さるるまゝの  
鬼 雲 仙城

静りまゝの静さるるまゝの  
景 子

静りまゝの静さるるまゝの  
香 静

静りまゝの静さるるまゝの  
柳 鳩

口切や静さるるまゝの  
松 門

静りまゝの静さるるまゝの  
香 静

倉くちねねねや捲くを龜、巴溪  
 命のたまはる昔はつこりりやどの船、素好  
 秋の雲やなとら秋しく清き色、吳水  
 梅は木のり掃ておぬ小春の家、兼高  
 かねる尾ねもた彩あきく星の世、華夏  
 や阿くそ又おとみやや船の居、牛周  
 肩丈さか電おきそのりかけれ、菱水  
 数條に名別ぬるや石落の世、梅旭  
 よし切の赤に志るむや磯の世、錦之

夕早

ぬきそまそおきくもや此の梅、東岬  
 清陰にさゆねお中お桐の世、一洋  
 肩をそくそそるや本所のも、李園  
 よんあした唐道そと向うりり、儿由  
 と申さくやとわさかまそ居た世の子、高橋  
 ちとれ〜海した舟のまゝの世、高村  
 海さやあ田たつるそのりけ、湖山

長崎より文音

明きより初春おはるをさるり、宗古  
 鏡の清くやまた善き日の静、梅家



に秋らしきと思ひ付ある小雀ふ 亀丸

山茶のぬきさくさくする根元 生く

えとも秋て月をさけり梅の影 白水

きくゆりよあを誠きちのまをれ 玉高

ゆふ秋のさくさくはるさくあま 吐玉

まねるや門のさくさく起もきん 宗儿

借まよいらりりさくさく居る阿や茶 風糸

さる月のともや梅の香にかくさく 柙美

鶴にゆくもさくさく暖なり福寿子 白月

あけ梅のさくさくもさくさくあま 湖立

はくさくさくさくさくさくさくさく 神仙

さくさくのさくさくさくさくさくさく 杉芽

月さくさくさくさくさくさくさくさく 解香

一何のさくさくさくさくさくさくさく 亀子

さくさくさくさくさくさくさくさくさく 清笑

さくさくさくさくさくさくさくさくさく 梨垣

秋風さくさくさくさくさくさくさく 古柙

秋風さくさくさくさくさくさくさく 亀文

志々梅の花さきもく白く水さき 湖之

ほくく水さきくくくも静く 神仙

くさきのさきくくく水さき 杉芽

月くくくくくくくくく 解香

一時的さきくくくくく 亀子

くくくくくくくくく 清笑

くくくくく山かきくくく 翠塘

新風くくくくくくく 古柳

新晴くくくくくくく 亀文

初の雲にけのきくくく残の襟 蓮河

暮さるるか 雲のうらみ 月琴

連鞠や志りふふ日よも枝の影 雪門

おろと吹風のさるるやほくじ 桐栗

あまのまきまきのうつるわう紫芽 鹿乙

車井のおととやうくまき月 亀江

床をみくはにけもあけ玉糸 静山

あま入やまぬけはそぬ灯の影 月麻

はげしくのぼにまよとる草の影 柳花

葉のむにまき及けけの地家ふ 虫風

あまれりあうたうつるやまの影 不石

あまのまきまきのうつるわう紫芽 微笑

山鳩のあうにまき及けけの地家ふ 嵐溪

あまのまきまきのうつるわう紫芽 可涼

深きこの乾くけけの地家ふ 尚志

さげひりあたあひくやまの影 法牛

あまのまきまきのうつるわう紫芽 其乃

けけのあまのまきまきのうつるわう紫芽 清南

葉の如に垂るればけしきも家も、  
画風

みおれりあうたうつやあの新、  
不石

西のうもやきうたに郭を、  
微笑

山鳩のあうにちるおく木の芽も、  
嵐溪

初とうはく新のけうも、  
可涼

深色の乾くけうしたや春の風、  
尚志

さびいりあたおいくやあの新、  
法外

弱きのおうたもあけりりり、  
其乃

け厚のけうもあけりりり、  
清南

花のや白ひをかくむ 垣はき 一か  
 桑中や雪のあうまに 松の  
 柳しもちうらの入るやまの風 里道  
 藤つらもさうく日えたるゆき 南行  
 子の苗とぬいひえゆわらぬ田のそ 篤人  
 たよる屋き草を枯もぬね 宣由  
 をかきゆりしせめぬ 筆風  
 ころね智に降出まやうき月 文雄  
 菜のきやなをくまを帰産 十得

雪のちや人をさるねてまら中 葵園  
 そのまや一板のひのねけり 素由  
 同は備したはれをさるや春のひ 新幽  
 水巻るしをさるやけり 起石  
 水ひの月のやて降るあまのふ 沽水  
 入る福をぬくおれぬ世はゆめ 芦東  
 ぬれさのゆきつらき 素席  
 ぬきぬけり 一腹  
 おもき信も 雲元

野の白く  
野麦

去る鳥や  
控良

痛しう  
奉堂

夢のつげ  
素亮

と飛ぶも  
鳥文

木もあさ  
犬蔵

心もあさ  
信女

心あさ  
兵丈

一志あり  
村輪

月や  
半井

心きゆ  
不及

鳥か  
控良

おも  
履跡

えの  
浦内

わ  
永来

鳥  
右十

鳥  
柳樹

鳥  
雪柳

うらふ山もさし新やうきのも みよ

ふにありしとさけけささきのゆき 仏浦

居るもさしとさけけささきのゆき 半彦

居るもさしとさけけささきのゆき 五柱

り向いた山のありしや秋のさき <sup>り希</sup> 如月

秋もろや琴柱つらうと 月哉

何けの午々町もたあるや 塘水

白居さのそ十年の法甚だつらあり

わきまは國にありのささきし修ん

ささきし修ん

きさしの一らきん 舎用

お居る士はわつ又單居るおまのひの

おありし身もささきし修ん

修ん

しつらもさしとさけけささきのゆき 仏浦

牽のありしとさけけささきのゆき 天亮

秋もろや琴柱つらうと 是

何れありしとさけけささきのゆき 無高

何れありしとさけけささきのゆき <sup>ん</sup> 台

何れありしとさけけささきのゆき 西

何の昔もろや琴柱つらうと 於素

まろ柳やささげをさるるやりの月 治具

菊の園の影やささの月 芳林

あまのりふにささやりの影 素向

まろ柳やささげのまろ柳影 杉成

ささげの影を拂ふわささ影 徳宣

ゆきやささげをささの影 龜山

まろ柳にささの影はささ影 若山

まろ柳やささの影はささ影 素人

まろ柳とささの影はささ影 知休

ゆきやささげの影はささ影 若柳 若存

ゆきやささげの影はささ影 若柳 若存

まろ柳とささの影はささ影 素儀

まろ柳とささの影はささ影 素儀

まろ柳とささの影はささ影 素儀

まろ柳とささの影はささ影 素儀

まろ柳とささの影はささ影 素儀

まろ柳とささの影はささ影 素儀



山吹子成 子さふらや体ま 一女

まのつらぬちうく 咲やねのむ 柙哉

まおに照る月を御免ておしまさう 秀花

村やまをうと持し さまおし 秀高

月をまてらうおぼさるのまお 洞成

あま里やまおに掛りし月の影 勢珠

おくまおのまおに志くおゆさす 富山

おの影のやに身平海ふをねおす 太原

つらうらぬくのまおかへ産せつき  
あまさくしんまもらひぬさるのま  
あまのま  
あまのま  
あまのま  
未月

あまの影形産のつらむらゆにつら  
うまよと極まらぬはらうし 佛  
まのほをまらつらむらゆ  
あまのま  
南函

天保十二年甲辰初九日  
白居居士二十回忌持香

子向

あまのまの月おぼし 一止

あまのまの月おぼし

みどりくもをとりけき蒸るも

呉城

かぬりあるお紫の露しきあま

永春

たそかちをそぬれそ乾き標あぶ

嵐秋

るのきふとおた館のさいたろう

三和

常や作つまらむもしとらま

良徳

木かをゆや互のかり精の程何ぞ

文仙

りる帆の肩をまゆれし秋のり

了洞

の精あくお中極たあある水の音

千弘

しる我々の影うすまは梅の枝

鳳棲

ゆもあまのゆるもあしけきき

お島

ゆしりたあして雲あまの煙薫

水津

時ゆも露うしかりねのしく

空御

指さも細く露しきあまの露

八詞

新きさくぬもやせいのそ

文人

まゆや油つらりかゆ

雲松

紫押につまる塘のゆくの影

紫湖

まゆりうきうあけけのむ

古山

梅  
月  
五  
幹



仙府立町三丁目  
白居堂 山田屋庄在衛  
雕刀

